どうやら俺は四天王の中で最弱みたいです

倉田シンジ
挿絵／黒澤清崇

立ち読み版

あとみっく文庫

魔界紳士淑女録

魔王紀3054年度版 改訂

そんなに扮ねないでよ
きゅんきゅんきちゃうから

パンドラ Pandora

魔王の娘なのでワガママで邪悪な性格だが、世間知らずな一面も。好意を寄せるリオンを四天王の中で活躍させようとサポートする。

人間の暮らしが
懐かしいな……

リオン Rion

かつて伝説の勇者を輩出した家系の出身。素質はあるらしいが、今まで剣も握ったことがないので才能は開花していない。四天王として蘇生させられたが弱いので下っ端扱い。

セリア Seria

リオンの幼馴染み。彼よりも実力は上であるため、普段は王国の騎士として働いている。勇者と判明する前からリオンの素質を感じ取っており、彼に少なからず好意を持つ。

ふざけないでっ！
遊んでいるつもり!?

呼び捨て……
口のきき方がなってない

ノーラ Nola

水を司る四天王ナンバー3。元々はスライムだったが、修練を積んで今の地位までのし上がった苦労人。見かけによらず、四天王ナンバー1を目指すなど野心家でもある。

スルト Surtr

四天王ナンバー2で筋肉質な武闘派タイプ。

風属性は地味じゃないっスからね

ベリアル Belial

四天王トップの最長老。いかにも強そうな風貌で炎属性を持つ。

ワシは情熱を持てあましておる

「あ、そこは……！　やめた方がいいッスよ？」
「え……。でも自分で選ぶって……」
少し抗議を含ませながら呟くが、スルトはさして気にせず、それどころか「いいからこれだけは聞いておけ」とばかりにずずいと顔を近づけてくる。
「これは土属性の扉。そして土属性といえば、パッとしないことで有名ッス」
「はあ」
「オマエが倒したグリムが持っていた、毒攻撃が得意な属性なんスよ。ヤツは四天王の歴史上、最弱の四天王と呼ばれていたッス」
「……ああ、なるほど」
土属性、いかにも地味だ。そして実際に弱かったらしい。
そっとドアノブから手を離し、左右のドアを眺める。
（とりあえずウンコ印だけは避けるとして……適当に選ぶわけにもいかなそうだな）
なので、ずらりと並ぶドアをひとつひとつ確かめていくことにした。
（うーん、やっぱり火が好きなんだけど、かぶったらダメだって言ってたしな……）
火のマークに未練たらしい視線を送りつつ、そこを通り過ぎて白い「＊」のマークへ。
（これは……なんだろう？）
「それは氷の結晶……ダメ」

珍しく感情を浮かべた瞳でノーラから睨まれてしまった。
自分の水属性と近いからか、これもダメな範疇（はんちゅう）らしい。
「それくらいのキャラかぶりは許してくれても……氷、けっこうよさそうなのに……」
「ダメ」
反論は許されなかった。
「まあいいですよ。他のにしますよ。えーっと、こっちは……お、鉄の属性かな？　結構渋くてよさそうな気がする……いや、でも……」
だんだんノリノリになってきている自分に気づかず、数あるドアを何度も行き来。
「よし！　やっぱ雷だな！　これしかない！　って気がしてきた！」
そして選んだのは黄色のギザギザマーク。これは間違いなく雷属性だろう。そしてなんとなく格好いいし、なにより派手だ。
「そういえば、試練ってなにをするんですか？　俺、武器とか防具とかアイテムとか、なにも持ってないんですけど……というか、ほぼ裸なんですけど」
ノブを回したところでようやくそんな疑問が湧いた。背後で様子を窺っている三人に確認しておこうと振り向くが、返ってきたのは予想外の言葉だった。
「武器がないと戦いもできぬのか？　素手でいいだろう」
「そうッスね。殴り合い最高ッス」

ベリアルとスルトが頷き合っている。そこから理解したのは、装備なんて与えられないということと、試練はやはり戦いによって行われるであろうということ。
「ちょ、ちょっと待って！　ムリです！　やっぱムリ！」
「ああ、それは勘違いッスよ。べつに戦わなくても、要は相手に自分の実力と適性を認めてもらえばいいだけッス。一番手っ取り早いのが戦闘ってだけで……」
「でも話し合いとかムリじゃないですか⁉　魔族の守護者と話し合ったとしても、俺みたいなよわっちい人間もどきを認めてくれるんですか⁉」
「……さあ？」
みんな冷たい。そういえばさっきベリアルが「死んだら死んだで構わない」とか、そんなことを言ってた気がする。これはつまり、どうせそこらで拾ってきた人間だから、また死んじゃってもそれはそれで別の者を四天王候補にすればいい、と。そういうことか。
（や、やばい……。これは想像以上にやばいんじゃないか⁉）
とりあえず言う通りにしてこの場をしのぐとか、そういうレベルの話じゃない。失敗がすぐ死につながる、本当の試練じゃないか。
「ほらほら、行ってくるッスよ！」
「うわわわわっ！」
なのにどんっと勢いよく突き飛ばされ、ノブをすでに回していたリオンが気づいた時に

は部屋の中。これも転送魔法の一種なのか、城の中とは思えない景色が広がっている。
「あわ……わわわ……！」
見渡す限り荒涼とした岩肌の荒れ地に、空の色は真っ黒。そこには月もなく、夜ではなさそうなのに稲光が走る様子がハッキリと見て取れる。
『我は雷を司る魔の精霊……。オマエが呼んだのか……？』
どこからともなく響いてきた声に、リオンは冷や汗を流さずにはいられない。
「あ、あの……とりあえず話を」
ビシイイイイッ！
話し合いを持ちかける間もなく、全身に衝撃。
「ひいいっ！　ちょ、ちょっとまっ……！　ぐふううううっ！」
バシッ！　ズガアアアアアン！
「ひっ、ががががが……！」
ビリビリしてまともに喋ることもできない。死ぬ。間違いなく死ぬ予感。
地を這うようにして後退するのが精いっぱいだ。
（ひいいいいっ！　無理無理無理！）
ところ構わず落ちてくる稲光におののきつつ、ずりずりと後方に開いたドアまで這って。
「うぐぐ……！　しっ、死ぬところでしたっ！」

ほうほうの体でドアから這い出てきたリオンの姿は、見るも無惨だった。髪の毛の先っぽがチリチリになって焼け焦げている。
「お、生きてるッスね。いきなり雷を選ぶなんてたいしたもんだと思ったッスが、ふふん。やっぱりダメだったッスね」
言外に「自分より派手な属性を選ぶなんて身の程知らずッス！」とも言われている気がする温かい言葉で迎えられて、ぜえぜえと息の荒いリオンはすでに死にかけ。
「……」
ノーラが「面倒な奴……」と言わんばかりの冷たい視線を降らせると共に回復魔法をかけてくれなければ、そのまま衰弱して昇天していたかもしれない。
とりあえずお礼を言うべきなのかどうなのか迷いつつ、生存本能に背を押されてやっぱり言っておくことにした。
「あ、ありがとう……」
だからといって、にこやかな笑顔が降ってくるわけもなく。代わりに杖が降ってきた。
「……ございます！　ありがとうございますっ！」
頭を杖で小突かれつつ言葉遣いを注意されたリオンは、身体はともかく心が満身創痍。
「はあああぁぁぁぁ……」
溜め息のひとつも漏れてしまうというものだ。

（だめだ……このままじゃ死ぬ。絶対死ぬ）
生命の危機がひしひしと迫っていることを感じる。
「派手な属性でなくていいんで、もうちょっと話の分かる属性ってないですか……？　戦闘になるにしても、もっと弱いのとか」
「うむ……そうだな。しかし仲間になるかもしれぬ我々としては、おぬしには強い属性を身につけてもらった方がありがたいのだが」
困り果てたお爺ちゃんといった具合に、ベリアルがあごヒゲを撫でながら答えると。
「うーん。戦闘なしでもいい属性となると……あそこくらいしかないッスかね」
スルトが言葉を濁しながらちらりと見た先には、そこだけは避けたいと思っていた排泄物の印のドア。切羽詰まった頭の中で、排泄物と命が天秤にかけられる。
「くっ……！　そ、そこだけは……いやです」
そもそもなんでそんな属性があるのか謎だが、かろうじてプライドが上回った。
「じゃあせめて、守護者を魔族が務めている部屋がいいッスね。さっきみたいな精霊が守護者を務めている部屋だと力がすべてなんで、戦闘になっちゃうことが多いッスよ」
「そっ！　それですっ！　話が通じる相手を教えてください！　どの部屋ですかっ⁉」
「たしか、土の守護者がそんな感じだったッスがこれは却下として、あとは泥の守護者とか、木の守護者や森の守護者……」

「土と泥もですけど、木と森も違いがぜんぜん分かりません……」
どんどんマイナーで細分化された属性が出てきてうんざりしていると、最後にようやくそれっぽいのが出てきた。
「ああ、このドアの闇の守護者も一応そんな感じッスかね」
「闇、キミに決めたっ！」
勢いよく立ち上がると、スルトが指さしていたドアに駆け寄る。黒い丸印が付いた、闇といわれれば確かに闇のマークに見えるな、というドア。
（闇ならむしろ願ったり叶ったりじゃないか！　充分に格好いいし、メジャーだし、誰かに『あなたはどんな属性の持ち主で？』って聞かれても堂々と答えられるぞ！）
しかしその時、背後からリオンを制止するような声がかけられる。
「しかし闇はな……。ある意味、戦いで力を認めさせるより難しいぞ」
眉根を寄せたベリアルだ。妙に難しい顔をしている。
「プライド高いッスからね……オマエみたいなペーペーじゃ間違いなく無理ッスよ？」
スルトまでそんなことを言う。
ノーラに至っては……まあこれはいつもの無表情で、突き放すような無言だが。
「いいえ、俺にはもうここしかないです。ここしかないんです！」
こうなったら意地だ。そもそも戦闘で力を認めさせるなんてのがハナから無理なのだか

ら、もうここしかないじゃないか。他のは変なのばかりだし。
もうあとには引けないと、悲壮な心持ちでドアノブを回す。
「気をつけるッスよ！　どうせ駄目だと思うけどー！」
背後からの声援を聞きつつ、意気揚々と部屋に踏み込んでいく……！
「……あ、れ？」
しかし、中はこれはこれで予想外。普通の部屋だった。
さっきのお城の部屋とたいして変わらない。ただ、調度品の数々はさらに豪華で、銀の燭台や重厚な机が整然と置いてある。小さなテーブルにはまだ水滴の付いた冷たい水やティーセットが置かれていて、それら陶磁器のひとつひとつがいかにも高価そう。リオンのポケットマネーではカップひとつも買えないだろう。
「ん～？　だれ～？　こんな時間に……」
「あ、あれれ？」
声がした方向を向くと、そこには天蓋付きのベッドが。
そこがもぞもぞ動いたかと思うと、眠そうな赤い瞳と尖った耳が現れ、続いてふわりと広がる黒髪が宙を舞った。
「……」
ベッドに寝そべったまま上体だけ起こしているのは、線の細い女の子だった。

きょろきょろと周囲を見回し、やがてリオンが部屋の中に居るのに気づいて……。
「きゃ、きゃあああああああああああっ！」
「うわあああああああああああああああああっ！」
その悲鳴につられてリオンまでびくっと後ずさる。
「ななな、なにごとっ！　お前、どこからっ……！」
「ちちちち、違うんだよ。俺は試練のためにここへ……！」
リオンの言い訳を聞いているのかいないのか、女の子はシーツを引き寄せて身体を隠すと、枕元にあった錫杖を引き寄せる。するとどこからともなく黒曜石のような黒球が浮かび上がり、バチバチと電撃めいた黒い光を弾けさせながらその周囲を固めた。
「わたしに夜這いをかけるとは、なんと愚かな……！　身の程を知るがいいわ！」
いかにも臨戦態勢。下手なことを言ったらさっきの二の舞、すぐさま戦闘が始まりそうな雰囲気だ。リオンはとっさに床へと膝をついて敵意のなさを示す。
「あ、あのっ！　俺は四天王の試練を受けてる最中でっ、それで闇の属性の守護者に会うためにここにやってきて……えーっと！」
夜這いの疑いを晴らすべく必死の説明。その願いが通じたか、
「あら？　いま四天王の試練と言った……？」
やっとのことで、吊り上がっていた女の子の瞳に変化があった。

腰は密着させたままに、身体を揺らしてペニスで中を掻き回す。
「はぅ、んんんっ！　はぁ、私が動く……んんっ！」
「いや、ここから先は俺が！」
自分でも調子に乗るのは悪い癖だと自覚しつつも、もう止まらないのだ。
あくまでお仕置き&籠絡作戦の続きを主張するノーラを制してローブに手を伸ばす。ケープを外し、首元の留め紐を緩めただけでスルリと脱げてしまった。
「っ」と息を呑んだだけのノーラは抗えず、リオンは容易(たやす)く乳房を手の平に収めた。
魔族だろうがスライムの化身だろうが、やはりここは弱いらしい。
「あっ、はぅぅ！　やっ……あっ、ふぅ、んぅぅ……ん」
小さいのにプニッとしていて、すっぽり手の平に収まった柔肉。軽く掴んで揉んだだけで、白肌をかすかな震えが走っていく。むしろ普通より敏感すぎるくらいだ。
「ひゃうっ、あ……ひぅ、ふぅぅ……」
小さな胸に似つかわしい乳首を指で弾いてやると、こんな時でもどこかぼーっとした感じの無感情さがある瞳がきゅっと細められる。
そして彼女の身体からふにゃっと力が抜けて。首に手を回して抱きついてくると、
「はぁ、うぅぅ……もっと、触って」
ついにはそんなことまで囁くほどに大人しくなってしまった。

ずきゅん、とハートを射貫かれてしまって、リオンの動きが活性化する。
（よし、なら徹底的にやってやる……！）
彼女の身体を後方に反らせると、小さいながらも存在感を主張する乳房がつんと前に突き出される。そこに舌を伸ばした。
ちゅぱっ！　と音を立てて吸いつき、さらには舌の腹でざらりと舐め上げる。
「ふっ、う……ぅん！　おっぱい、んっ、ムズムズするぅ……！」
すっかり素直になった水の四天王は、ぎゅっと頭に抱きついて自分から胸を擦りつけてきた。窒息するようなボリュームはないけれど、押しつけられる顔面にプニプニと跳ねる張りのよさが心地よい。
リオンは限界まで大きく口を開いて、小ぶりなおっぱい全体を呑み込まん勢いでむしゃぶりついた。
じゅぱっ！　ちゅ、ぴちゃぴちゃっ！　ずりゅっ、ずずずっ……ちゅぱっ！
「はぁぅぅ……！　リオン、っく！　はぁ、ふぅ、んん……！　気持ちいい……！」
自分でもそんなに感じてしまうとは思っていなかったのか、驚いたように目を見開き、次には一転して弱々しく目を泳がせるノーラに、しつこいくらいの吸引で応える。
口が二つないのが残念だ。仕方がないからもう片方のおっぱいには手をかぶせて、ちょっと強いくらいに乳首を摘んであげることにした。

こりっと指先に心地よい感触を、人差し指と親指で挟んできゅっきゅっとリズムよく摩擦する。それに合わせてもう片方は唇で完全に覆い、チロチロと舌先で乳頭をほじるようにくすぐってやる。

「っは！　はぁ、あう、うううぅ……！　ひっ、ひあっ！」

感極まったように震えるノーラの身体から、ふわりと力が抜けてしまう。

胸愛撫だけなのに、軽い絶頂を迎えてしまっているようだ。

（でもまだまだ……こっちもだ！）

さっきから膣内に埋まったまま動いていなかったペニスだが、わずかたりとも勢いを失ってはいない。なにもしなくてもにちゃにちゃと舐められるような刺激があることも原因だが、リオンの興奮は高まる一方で、さっぱり収まる気配がないせいだ。

軽くイッたぐらいで満足されてしまっては、こちらとしては欲求不満だ。

「うぅん、っ……。あ？　うぅ……」

状況がよく分からず「まだするの？」とでも言いたそうに瞳を揺らすノーラに、思い切り突き上げた腰の動きで応える。

「んんっ、はぁうっ！　ひ……っんんっ！　こすれ……ふうっ！」

すっかり油断していた下半身を責められ、一瞬で少女の意識が引き戻された。

しかしそれだけでは足りない。リオンは背を反らしていた彼女の身体を引き寄せると、

がっちりと抱きつくようにして細い身体を上下させる。
ノーラもぎゅっと抱きついて、涎でベトベトになった上半身を擦りつけてきた。
こちらの胸板につんつん当たる乳首の感触。それを自分で擦りつけるように動いているから、ノーラの全身がうねって、膣肉にもみくちゃにされるペニスがずくんと脈動する。
尖りを強くしてコリコリしている乳首をもっと擦りつけられるように、リオンも腰を跳ね上げてその動きをサポート。
くちっ、ずずずっ！　にちゅっ、ぷちゅ、ずっちゅ、ずちちっ！
小刻みな縦揺れで乳房が跳ね、膣内が激しく擦れる。
「んくっ！　もっとしてっ！　これ、気持ちいいっ……！」
ますますしがみついてきたノーラは、普段からは考えられないくらい感情をあらわにしている。ひたすら快楽を求めるというその一点で。
（ノーラ、さっきより感度がいい……。どんどん気持ちよくなってる？）
肉棒にまとわりつく感触が強くなったり、弱くなったり、彼女の感じているであろう感覚を細かな動きにして如実に伝えていた。
そのひくつきが、奥まったところを突き上げるたびに強まっているのに気づく。
「ノーラって、ここが気持ちいいんだ？」
ぐりっと最奥に叩き込んで、そのまま剛直で膣内を攪拌するように腰を揺らす。ぐちゅ

っ、にゅぶっ、と。激しく音を立てて結合部が鳴り響き、密着感がますます高まった。
「っふ……！　うぅ……」
答えが返ってこないので、もう一度同じところを突き上げてみる。責めているつもりはないものの、こうしているといつもとは立場が逆だ。
「あううっ……！　ふぅ……い、言わない」
ノーラも同じことを感じたらしい。責められることには慣れていないからか、眉を寄せて切なげに沈黙。しかしその返答では認めたも同然だ。
しかも、その表情が不機嫌どころか被虐の快感からのものであることは、にゅるっと蠕動した膣内の反応が物語っている。
リオンがすべきことは決まった。
（このままイカせてやる……！）
ちょっと嗜虐的な興奮を覚えながら、最後の力を振り絞って彼女の身体を突き上げた。
すでに血管を浮き出させた肉棒はいつ暴発してもおかしくない。こちらとしても早く精を吐き出したくてしょうがないのはやまやまだけれど、その前になんとかしてノーラを満足させておかないと、という義務感めいた気持ちも芽生えている。
（な、なにしろ……このままじゃあとが怖い気がするし！）
一応、四天王内での上役。上下関係に厳しい四天王なので、下手をすると面倒なことに

なりそうな気がする。ましてこんなに乱れたノーラを見るのは初めてのこと。満足させておくに越したことはない。

思い切って尻の方に手を回し、彼女の身体を持ち上げる。

にゅぶぶぶ……。

小さなお尻を持ち上げて、代わりにペニスが抜かれていく。

「はぁ、はぁ……。んっ……」

息を荒らげたノーラがわずかに身じろぎ。ぽっかりと空いた接合部分から大量に、たらたらと愛液が滴り落ちていく。

「うわ、こんなに濡れてたんだ……」

と迂闊にも呟いてしまったのを聞き咎められ、「これはおまえのせいだ」なんて感じの、拗ねるような責めるような視線を投げかけられつつ……そこから、一気に。

ずちゅううっ！

「ひっ、ふぁああああぁっ！　やぁ、ううううっ……！」

がくん、と落ちた勢いと落差の衝撃がノーラの背をぶるるっと震わせる。むろん、それはリオンの側にもすさまじい快感を巻き起こした。

（ううっ、中が絡みついてくるぅ……！）

進入したペニスをぬじゅっと圧迫してくる柔襞に情けない声を上げそうになりながらも、

暴発を紙一重で我慢して尻肉を掴んだ。
そのまま少女の身体を持ち上げ、同時に自身も腰を揺らして終局に向かって抽送開始。
ぬちゅううっ！　ぐちゅ、ぷじゅ！　にゅっぷ、にゅぷぷっ！
「ふあああっ！　うんっ、ふ……！　はぁ、あぁ……！」
天を仰いだノーラの口元から、つううっと涎が垂れ落ちていく。
見た目はリオンより年下に見えるのに、涎を垂らし、うっとりと瞳を揺らすその表情はというと、体格にそぐわない淫らさに満ちていた。
見ているだけでゾクゾクさせられてしまう。パンドラの時と同じように、魔に魅入られているのではないかという背徳感が腰の奥のわだかまりをなおさら刺激してくる。
「うあっ！　ノーラっ！　うっ、く……！」
しかも、性感の高まりに連動して剛棒がきゅううっと締めつけられる。ノーラの細い腰は、この短い時間の間にくねくねと回転するような動きを覚えていた。
「リオン……はうぅっ、いいっ……。んんっ！　はぁ、はぁ……！」
いやらしく腰をくねらせる少女に促され、亀頭が抜け出そうになるほど持ち上げては奥に叩きつける。そこには彼女の弱点部分が。
「ふうっ、んくっ！　い、あんんっ！　こ、こんなに気持ちよく……うっ、んんん！」
高まりゆく感覚に翻弄（ほんろう）されつつも、少女は瞳を蕩けさせてしっかりその感覚を味わって

いる。本能で、もうすぐさらなる絶頂の波が来ることを予感しているのかもしれない。
ノーラの声はじわりじわりと大きさを増して、普段では聞くことのできない音量に。
「いく、ぞ……！　もうすぐ……ううっ！」
「ひうあああっ‼　リオ、ン……！」
短く大きく叫んで、ノーラはこくこく頷きながらしがみついてくる。
男のその瞬間を求めるように圧迫感を増した膣内では、刻一刻と強まる柔らかな締まりが襲いかかってくる。彼女のうねり腰もこちらに動きをぴったりと合わせてきた。
ぶちゅっ！　ずちちちっ！
膣襞に嬲られるままにさらなる抽送……。
彼女の尻に沿わせた手に力を込めて動きを制し、わずかに息を止める。タイミングを知らされたノーラの身体が、歓喜の予兆にふるると痙攣（けいれん）した。
（ノーラの奥に……一番奥にっ……！）
ずぶぶぶぶっ！
みっちりとした柔らかさに満ちた肉壁を、あっという間にかき分けていく亀頭。
押し出された愛液が股間にぴちゃぴちゃと降りかかるのを感じながら。
肉幹が蠢く肉襞にすみずみまで舐め上げられるのを感じながら……。
「ひゃんんんっ！　あああうっ！　お、くぅ……！」

彼女がかつてない大きな声で叫ぶと同時、最奥に到達したペニスが白濁を迸らせた。
どっぷぷぷぷっ！　びゅるるっ、どくどくどくどくっ！
性欲の高ぶりに比例して量を増したような大量の精液が膣奥へぶちまけられていく。その感触にきゅんっと縮み上がった膣内が、少女も絶頂に達したことを示していた。
「あっ、あああああっ……！　すご、ひぁっ！　はぁっ、う、くぅ――――んんんっ！」
イクという言葉を知らないのか、犬のように鼻を鳴らしてノーラが身体を硬直させる。そして腰から生まれた甘やかにして強烈な痺れに全身を包まれて……。
「はうっ、はぁ、はぁ……ひはぁ、うぅん……っ」
がくりと、全身から力を抜いた。

※

二人がほぼ同時の絶頂を迎えて、ようやく息を整えて。
「なっ、なななっ……！」
突然リオンの部屋の中に響いたのは、気だるい空気とは無縁の素っ頓狂な声だった。
びくっとしたのはリオンだ。
「えっ⁉　パ、パンドラ……！　なんでっ⁉」
ドアを開けて立っていたのは、今度こそ本物のパンドラだった。
「……ふーん」

ようやく動き始めた頭の中でさっきの言葉を反芻する。
「好きだったかもしれない」とは少しあやふやな言葉だが、それだけでもものすごい破壊力があった。なにしろセリアが自分を好きという可能性は、リオンの中では砂粒よりも小さなものだったのだ。
（こうなったら、なんとしても俺がリオンなんだって信じてもらわないと……！）
セリアを騙しているような現状への不満が、怒りに似た感情となってふつふつと沸き上がってくる。ざわりと、体中の毛が逆立つような妙な感覚……。
（パンドラの意識が逸らされてる今だったら……いけるかもしれない！）
『ちょ、ちょっとリオン⁉　え⁉　なにしてるの⁉　どうして腕が……』
とにかく精神を集中して、全身の力を一点に、右腕へと注ぎ込む。
「よし。なんとか……！　み、見てろよ、セリア！」
闇の守護者によって制御されていたはずの身体が……右腕だけだが、それがリオンの意思によって動いている。その手は自らの頭に向かい、兜を掴んだ。
そのまま乱暴に脱ぎ捨ててしまう。もちろんその下から現れた人物は……。
「ええっ⁉　リ、リオンちゃん！」
「そ、その呼び方、やっぱりちょっと照れるな……」
腕を無理やり動かした反作用でか、全身がものすごい倦怠感に包まれる。

『と、とんでもないコトするのね……。さすが勇者ってところかしら……』
呆れたような、感嘆するようなパンドラの呟きを聞きながら、まずは事態の説明を、と口を開く。今度こそ信じてもらえるはずだ。
「セリア、実は俺、一回死んじゃってさ。それで四天王になっちゃって……」
ぽかーんとしているセリアに向かって口早に説明。ここまできたらとにかく全部話してしまって、あとは野となれ山となれだ。
「まあ途中は飛ばして、とにかく人間なのに四天王として働いてるんだよ。そしたらこの城にセリアが来ちゃって、バレるのも嫌だったから追い返そうとしたんだけど……」
ぽかんとしたままそれを聞いていたセリアが、そこで我に返った。
「四天王に……なった……？　なのに私を捕らえて勇者の情報を聞き出すの……？」
「勇者の情報がどうのこうのは実は関係ないんだよ。事情が複雑なんだけど、パンドラっていう女の子がちょっと暴走しちゃってて……」
『あ、失礼なこと言われた気がするわ』
「ごめんってば！　いいからパンドラはちょっと自重して！」
口を挟んでくる魔王の娘を黙らせておいてから、再び説明を再開……しようとして。
「あれ？　セリア、なんでそんな怖い顔を……」
さっきよりさらに眉を吊り上げ、こちらを睨みつけてくるセリアに気づいた。かつて遭

遇したことのある幼馴染みの怒り度合いでいえば、たぶん最高ランクの表情だ……。
「そんなわけない！　リオンちゃんはたしかに剣も魔法もダメダメな勇者だけど、こんなことしない！　私を、女の子をこんなひどい目に遭わせるようなことは！　どうせ魔物が化けてるんでしょう！」
「あああっ、話を聞いて！　それは俺じゃなくて身体を操ってる女の子がいて、それが俺の守護者なんだけど……ああもう、説明が面倒だな！」
告白めいたことを聞いてしまった嬉しさや、自分がリオンだと分かってもらえない悔しさ、ついでに目の前の幼馴染みが晒した痴態への背徳感や興奮までもが混じった複雑な感情が膨れ上がって……、ぷちーんと頭の中のなにかがキレた。
（さっきの力をもっと強く……！　もっと全身に……!!）
今度は腕だけでなく全身に力をみなぎらせる。
『ちょっとリオン、まっ、またなの!?　きゃあああああっ！』
バシュンッ！　と黒い靄がリオンの身体から弾けたように見えた。代わりに神々しい光がうっすらと身体を包み込み、薄暗い空間を照らしている。
セリアはもちろんのこと、事態を傍観していたノーラもこれには目が点になった。
（よし、歩ける……！）
すでにパンドラは頭の隅に押し込められてしまい、実体化できないどころか、すべての

力が使えなくなっている。もちろんリオンの身体もその制御から解放されていた。
『こ、こらっ！　なにしてるのよ！　勝手に動いちゃダメええっ！』
さっきと違って、もう意識せずとも普通に身体を動かすことができた。精神の集中もいらなければ、無理をしたせいで脱力感に悩まされることもない。
「勇者の力……解放されてる」
ノーラがようやく呟き、いつも眠たそうな眼差しを珍しく驚きに開いていた。
リオンがセリアのもとへと向かい、その肩に手をのせる。
「ななな……なにっ⁉　やだっ！　こないで！」
しかしそんなことを言うセリアの瞳からは険が消えて、今はむしろ戸惑っている。
『バカバカバカ！　やっぱりわたしより人間の女の方がいいの⁉』
パンドラが騒いでいるのを聞いて、無意識に目を動かしてしまった。
はだけられた胸や太腿に目が行ってしまう。と同時にそれらを縛めている触手にも。自分が本物であることを証明するように、リオンはそこに巻きついていた触手を弾き飛ばす。
『ノーラ！　邪魔して！　あの二人、なんだかいい雰囲気よ⁉』
「やってる……けど、だめ」
弾き飛ばされた触手で今度はリオンを止めようとしているノーラだが、それが勇者の身体に触れた途端に弾かれてしまう。ならばと杖を構えてみるものの、繰り出す魔法も効果

を発揮することはなく。二人の周囲にはリオンが発揮した力による結界が出来上がり、すべての妨害は無効化されてしまっていた。
「リオンのくせに……」と不満げに呟くノーラを見て、もはやパンドラには打つ手なし。
『あうううう……ばかばかばかー。なに雰囲気作っちゃってるのよー！』
頭の中に響く声を意識の外に追いやったリオンが溜め息をつく。
（まったく……こんなに騒がしいんじゃ、いい雰囲気もなにもないよ。まずは事情を納得させてセリアを逃がしてあげないと）
「俺は本当にリオンなんだよ……今まで身体を操られてたけどさ。さっき言ったのは全部本当なんだ」
「え……？　で、でも……」
「ほら、鎧は壊れちゃったけど、剣は返すから早くこの城を出て。あとは俺がなんとかするから、王様にはそっちでうまくごまかしておいてよ」
同じ勇者の血筋として、魔物を弾き返すその力が本物だと本能的に察しているのかもしれない。セリアはもう疑ってはいないようだった。
その証拠に、立たせようとリオンが差し出した手を引き寄せて抱きついてきて。
「リ、リオンちゃん……ホントにリオンちゃんだ！　やっぱり生きてた！　助けに……来てくれた……！」

押し倒されるみたいに尻餅をついてしまったリオンの胸に、ぎゅっとしがみついてきた。
「ははは……助けに来たっていうか、ずっといたんだけどね」
おっぱいがむにゅっと当たっている。なんだか、頭の隅でパンドラが騒いでいるような。
「ううっ、私、すごく心配して……！　みんな死んだって言うから……！」
さっきから感情をぶちまけすぎていた影響なのか、セリアは見たことがないくらい動揺して泣きじゃくってしまっている。それがなんだか可愛くて、凛々しいセリアも好きだけどこんなセリアも……なんて気分がムラムラと。
「あの……すごく言いづらいんだけど。さっきからおっぱいが当たりすぎてて……」
「……え？」
見上げたセリアと視線が交差し、さっき告白めいたことを言われたのも思い出してすごく恥ずかしくなった。ついっと目をそらすと、彼女もそれに気づいてか真っ赤になる。
「あああっ……私、さっきとんでもないこと言った……!?」
ようやく泣き止んだのに今度は俯いて硬直してしまって、二人してそのまま抱き合うような格好でしばらく時間が経過。やがてセリアがもぞもぞしだす。
「あ、あの……リオンちゃん？　当たっ、あ……当たってる……」
「え？　あ、うん……当たっちゃってる、かも」
つっかえながらにモジモジするセリアも、ずーっと勃起しっぱなしだった股間の接触に

気づいたリオンも、普通なら慌てて身体を離すところなのに離れない。
やがて二人の視線が絡み合い、唇が重なる。
自分でもずいぶん積極的だと思ったが、そうしたいという衝動が抑えられない。おそらくはセリアも自然にそうしてしまったのだろう。
舌がするりと口腔に滑り込み、ひくっと引っ込められたセリアの舌を舐め上げる。
一瞬は怯えたように目を揺らしたセリアだが、くちゅくちゅと唾液の絡む音が鳴り出す頃には、くすぐったさに溶けてしまったように眼差しを緩やかにしていく。
「んむ……ふあっ。はぅ、む……リ、リオンちゃん……」
ぷはあっ、と口を離しても、彼女の視線は蕩けたまま。
「俺がリオンだって分かってくれた？」
「し、知らない！　魔物が化けてるんでしょ！　だいたい、本当にそうだったらさっき本気を出して助けてくれても……私にあんなに恥ずかしい格好をさせて……」
恥ずかしそうに目をそらしてブツブツと文句を言っているが、そんなことは言っても理解をしているのだろう。
その証拠にまったく抵抗しないし、むしろすがるように抱きついてくる。呼び方だってすでに「リオンちゃん」で固定だ。
「またまたそんなこと言って……もう分かってるくせに。さっき好きだとか言ってたし」

「そっ、それは、好きかもって言っただけで！　そこまでは……！」
軽くからかいながら、セリアの身体を倒していって仰向けに覆い被さる。
さっき触手に嬲られていた乳房の上に頭を移す。仕返しとばかりに彼女は頭をがっちり抱え込んでくるが、顔面には至福の柔らかさが溢れていた。もちろん嫌がりもしない。
この行動を見れば、あの告白が彼女の本心だったことは間違いないだろう。
（セリアのおっぱい、吸ってみたい……）
残っていた邪魔な布を剥がすと、目の前にぷるるっと揺れる二つの乳房が現れた。充血して綺麗なピンク色をした乳首の周辺をペロペロと舐め回し、その頂点を唇に挟む。
ちゅっ、ちゅぱ……ねろっ、ちゅ……。
「あんっ！　はぁ、うぅ……やっ、び、敏感になってるから……ひあんっ！」
「そんなに可愛い声を出されるとすぐ出ちゃうかも」
と言いながらズボンを下ろして窮屈そうにしていたペニスを取り出す。セリアを床に寝かせて太腿を抱え、びしょ濡れのショーツに勃起を押しつけてみた。
「あうっ、こ、これ、まさか。んんっ、熱い……よ」
「こっちも柔らかくてあったかい。押しつけてるだけで出しちゃいそうだ」
割れ目に沿わせた肉茎をぐにぐにと押し込むと、左右の恥丘が持つ膨らみが心地よく圧迫を返してくれる。そのたびに鳴り響くぷちゅぷちゅといやらしい音が、セリアへの催促

のようにペースを上げていく。
「はぅ、んんっ！　やっ、本当にっ、ああうっ！　今の私、だめだからぁ……！」
すでに一度絶頂して充分にほぐれている肉体が、男からの刺激によって簡単に快感を生み出す。いくら恥ずかしくて拒絶してみせても、それが本心かどうかは非常に怪しい。
（しかもさっきから、むしろ腰を押し出してきてるし……）
セリアはおっぱいを隠すように横臥状態になって、それなのに腰はゆらゆら悶えさせている。たとえ意識していなくとも、その動きは男を誘い入れているようにしか見えない。
再び前屈みで乳房に吸いつくと、セリアはむしろそれを待っていたかのように背を反らし、乳房の丘陵を持ち上げてくる。もう隠すことのできない喘ぎを漏らし始めていた。
「乳首ばっかり、んっ！　そんなにっ、っはぁはぁ、だめぇ……！　んくっ！　ひゃんっ！　く、くすぐった、あんんっ！」
コリコリとしたしこりを持った乳首を軽く甘噛み。途端に切なげに目を細めたセリアが長い吐息を吐き出し、口を離した瞬間に鋭く身を震わせる。引っ張られた乳房が解放と同時に張りのある重量感を見せつけ、ぷるるんっと弾けた。
『ダメダメダメ！　リオン気をしっかり持って！』
「ずるい……」
頭の中と少し離れた場所でそれぞれに文句を言っている女の子達を置き去りに、リオン

は下腹へと手を伸ばした。じっとりと濡れたセリアのショーツに指を引っかけ、ずりずりと横に押しやってしまう。

濡れた秘所は金色の恥毛をしっとりと茂らせ、そこに走る恥裂はすでに口を開いていた。ピンク色の鮮やかな粘膜部分がそこから顔を覗かせ、てらてらと光っている。

「すごい。入り口がヒクヒクして……入れてほしがってるみたいな」

「ば、バカっ！　リオンちゃん、なに言ってるの！」

ぽかっと頭を叩かれたが、その力は弱々しい。恥ずかしさに顔が真っ赤になって、セリアはそれきり顔を逸らしてしまった。そしてそれ以上の拒絶はない。

ちょっと拗ねたようなセリアを愛しく思いながら、亀頭をその膣口へとあてがう。愛液をまとったそこが、ぴとりと吸いつくような感覚……。

「入れちゃうけど……いい？」

あえて聞いてみると、セリアは少しの間そっぽを向いていたが。

「し、仕方ないでしょ。リオンちゃんのソコ、苦しそうだし……」

あくまでも仕方ないと強調しつつも、最後には、

「……いいよ。初めてはリオンちゃんにあげられたらって……私も思ってたし」

少し恥ずかしそうに、処女を捧げる言葉を呟いてくれた。

リオンの理性も、もうそろそろ限界だ。

横臥したセリアの太腿を引き寄せ、同時にペニスを押し出していく……。
（うぉっ、きついな……。いきなり狭くて、くっ！　擦られる……！）
まだ入り口を過ぎたばかりなのに、きゅきゅっと膣壁が狭まってくる。まだ繋がったと言えないうちから漏らしてしまわないように、リオンはゆっくりと前進して……ぷちりと。
「くっ……！　あ……はぁぁ……！」
処女膜を傷つけられた痛みにセリアが喘ぎ、リオンを見上げてくる。
しかしその視線は、この行為をやめることを望んではいない。
「セリアっ！　いくよっ……！」
そこからはひと息に純潔の証を押し開いた。そのまま奥まで一直線に進んでいく。
「ひっ！　う、んんんっ！　すご、リオンちゃんが入ってきてるのが分かるよ……！　ひゃふっ、うんんんっ！　はぁ、はぁ、くぅんん……っ！」
恥ずかしそうにしながらも、セリアは必死にリオンに合わせて、身体を動かさずじっとこらえる。さっき触手によって施された前戯のおかげか、そこからはスムーズに挿入が進んだようだ。締めつけの強いわりに充分ぬめった内部は、にゅるにゅるとペニスを揉み込むような感触で迎え入れてくれる。
（いけそうだ……。セリアも感じてくれるといいけど）
なるべくなら痛みは感じさせたくない。と思って最奥まで突き当たったペニスを止めて

みる。そうして眼下のセリアを見てみると。
「だいじょうぶ……あんまり痛くないよ。もっと動いて……」
セリアへと思いが伝わったのか、はにかみながらそう言って微笑んでくれた。
その表情と言葉にきゅーんと心臓を射貫かれて、リオンは腰を大きく引き出す。
ぬにゅるるる……ぷぷっ！
うっすらと赤い液体をまとった亀頭のえらが膣口から外れそうになったところで、突き上げるように上向きで再挿入。亀頭がずりゅりゅっと膣壁をすべる。
「うく！　セリアのなか、なんかザラザラして気持ちいい……！」
「あふ……うっ！　はぁ、ひゃうんっ！　そっ、そこ……ぅうんっ！」
ぞくっとしたものを感じて背を跳ねさせるセリア。
リオンは陰核に手を当てながらペニスを引き抜き、コリコリと指の腹で押しながらもう一度ペニスで突き上げる。その拍子に、ぬるりと包皮が剥き上げられてしまった。
「ひゃあっ！　リ、リオンちゃ……あふっ⁉　そ、そこはだめぇ……！　お、おかしくなっちゃうから……っは！　ふぅ、ふぅあああっ！」
どうやら膣内の上側が弱いらしい。ついでに包皮を脱いだクリトリスもいじってあげると、彼女の身体が目に見えて反応した。
「はふっ！　いっ、んんっ！　すっ、すご、ああっ！　怖いよ、リオンちゃんっ……！」

未知の強烈な性感に翻弄され、髪と乳房を跳ね上げ、泣きそうな顔で目を細める。その戸惑うような表情が、幼かった頃の彼女に重なった。さらには、凛々しくて美しくて、いつしか憧れを諦めていた女騎士の表情にも。

セリアと交わっている実感が心を満たし、ペニスがぎちりと張り詰める。

（ううう！　興奮してるせいか俺もすごく気持ちいい！　っていうか中がヌルヌルざらざらで……！　亀頭が擦れる……！）

奥に当たった亀頭がきゅううっと狭まってきた膣の柔肉で包まれ、ペニス全体を擦り上げる蠢きで奥へ奥へと吸われていた。

「止まらない……！　セリアっ、ごめん！　俺、気持ちよすぎて……！」

「いっ、いいから……。リオンちゃんの好きにしてくれていいからっ……！」

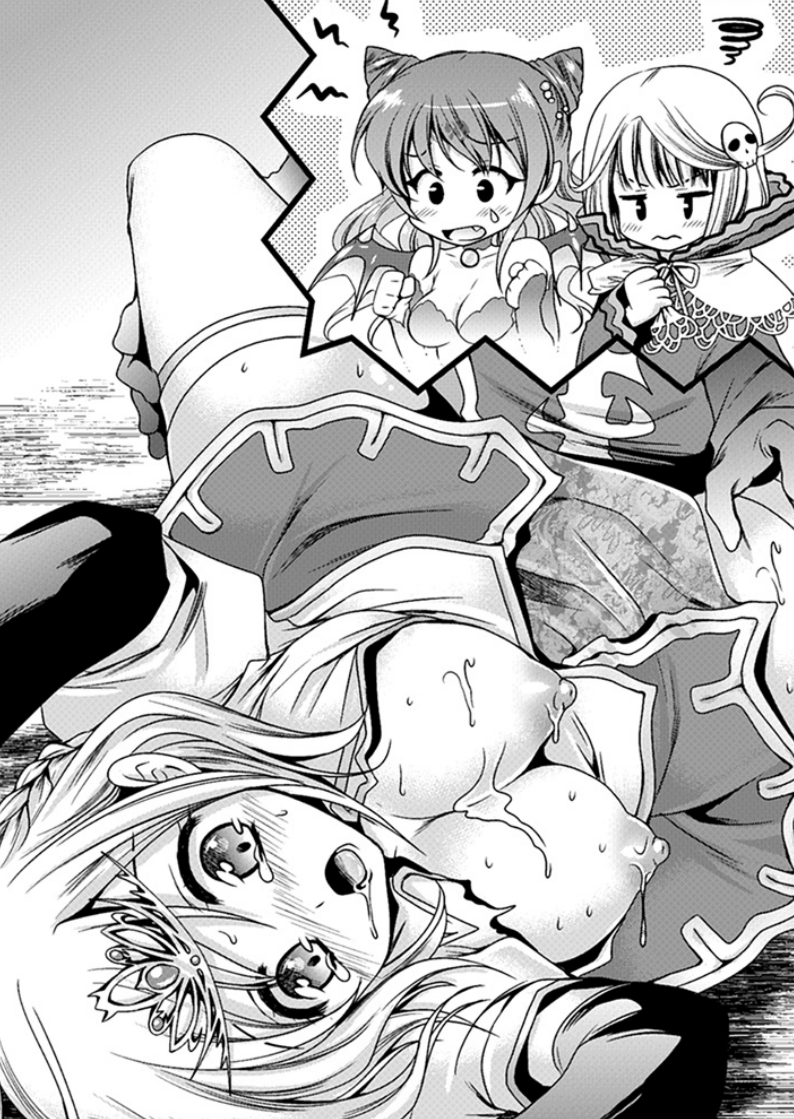
ペース配分も動きの制御にも頭が回らない。とにかくセリアの中に突き込んで、掻き回して、一番奥に精を吐き出したい。

ぶちゅっ！　ずにゅるる、ぐぷぷぷっ！　ずちっ、くちゅっ！

腰を押し出すという行為だけが頭を支配し、肉体的な昂りはますます募る。

「んくっ、ふぅ、はぁ……ああっ！　今のリオンちゃん、すごく、んんぅっ！　男らしいよ……。こんなに硬くて、こんなに力強い……っん！　ひぅぅっ！」

「は、恥ずかしいって……。でもセリアだって、こんなにいやらしくて、こんなに可愛か



ったなんて……。うっ、吸いついてくる……！」
幼馴染み同士、それまでの十数年ではあまり触れることのなかった新しい面を見て微笑みを交わしつつ、照れながらも快楽をむさぼる。
「あんっ！　ねぇ、そこ……ぉ！　リオンちゃん、もっと触ってぇ……！」
すでにセリアも出来上がっていて、ついさっき処女を失ったとは思えない乱れよう。リオンの動きにぴったりと腰の動きを合わせ、嬉しそうに相手を引き寄せる。
応じてリオンもクリトリスを押さえ込む。挿入のタイミングに合わせて愛液まみれの親指で擦り上げ、抜き出すタイミングできゅっと軽く押し込んでやる。
「ひぁっ！　あはぁ、あんんっ！　すごいよぉ、リオンちゃん！　私っ、初めてでこんなになって……はふっ、ううんっ！　恥ずかしいのに、嬉しくて……！」
ぽーっと頬を染めてうっとりとした表情に確かな歓喜を浮かべ、セリアはぎゅっと抱きついてくる。それを抱き締め返して、リオンも腰を振りたくった。
リオンは最後の瞬間に向かって一段と抽送のスピードを上げた。彼女の太腿をしっかりと両手に支え、トドメとなるピストンを開始する。
ぐちゅうっ！　ぶちゅ！　ずちゅっ、にちゅ！
二人が繋がる部分で愛液は溢れるほど。卑猥な音が牢獄の狭い空間にけたたましく鳴り響き、ますます二人は昂りを増していく。

「ひあぁっ、はぁ、あうっ！　くふんっ！　気持ちいいよぉ……はうっ！　リオンちゃん、リオンちゃんんっ……！」

セリアの喘ぎは熱を持って、それに応えるこちらの動きもどんどん激しく。

ずぷぷ……ずちゅううっ！　ぐりゅうううっ！

セリアの腰を固定してごく浅い突き込みを繰り返していたのを、一転して深いストロークに変える。身体ごと押し込むようなリオンの動きに、セリアは大きく背を反らして、惚けた表情に期待を滲ませていく。

「あはぁ、ああ！　一番奥まできてるぅ……っくはあああっ！　ひんっ！　あっ、んんんっ！　すごひっ、んふっ！　ふぁ、あああぁぁぁっ！」

がくんがくんと身体を跳ねさせ、セリアの瞳が虚空に漂い始める。

（くぅぅ……も、もう少し！）

そこから彼女が絶頂しかかっていることを悟ったリオンは、最後の力を振り絞った。

ずちゅっ、ぼびゅっ！　にゅぶぶぶっ、ずちちちっ！

「ああっ！　ひっ、わたしっ、あっ、ふぁああんっ！　イッ、ひゃうっ……きもひっ、あぁっ！　気持ちいいっ！　ああっ、リオンちゃああんっ！」

絶え絶えの言葉で自分がイキかかっていることを伝えてくるセリアの呼吸に、最後の突き込みがタイミングを合わせる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い！
キルタイムのアダルトコミック誌！

業界唯一！ エロラノベ&エロコミック満載!!

二次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌！

コミックアンリアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ！

メガミクライシス

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

書店、書籍通販サイトなどで好評発売中！
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト http://ktcom.jp/

title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』 トキサナ

『ドSの流儀』 chaccu

『生徒会長前哨戦?』 天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

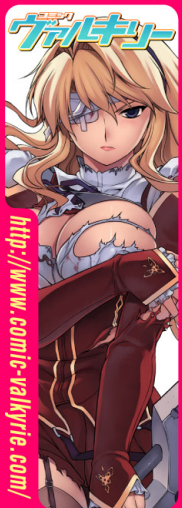
各種ダウンロードサイトにて発売中!

※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

あとみっく文庫
どうやら俺は四天王の中で最弱みたいです
【電子書籍版】

著　者
倉田シンジ

装　丁
キルタイムコミュニケーション制作部

発　行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル1F
●編集部 TEL.03-3551-6147／FAX.03-3551-6146
●販売部 TEL.03-3555-3431／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Shinji Kurata 2012-2013
当ファイルは、あとみっく文庫『どうやら俺は四天王の中で最弱みたいです』
（2012年10月29日　初版発行）に基づいて作成しております。

http://ktcom.jp/